「キリストを着るもの」

ガラテヤの信徒への手紙３章２３－２９節

森島　牧人　牧師

先日のイースター礼拝（3/28）の時に行われましたバプテスマ式のことを考えながら、今日の御言葉を見て行きたいと思います。

キリスト教では、イースターの次の日曜日を「白衣の日」と呼んだ時代がありました。当時、イースターの日にバプテスマ式が行われ、受浸した人には白い衣が与えられていました。その人はそれを身に付けて過ごし、一週間経つとその白い衣を教会へ返すということが行われていたようです。そこで、イースターの次の日曜日を「白衣の日」と呼ぶようになった所以です。

ヨハネ黙示録７：９－１０には、「この後、わたしが見ていると、・・・だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、・・・玉座の前と小羊の前に立って、大声でこう叫んだ。『救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである。』」とあり、続いて７：１４には白い衣を着た人々について「・・・『彼らは大きな苦難を通って来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。』」と記されています。血で洗って白くしたというのは不思議な表現ですが、神の小羊であるイエス・キリストの十字架上で流された血が人の罪を浄め、その人の衣を白くしたという意味でしょう。ですから白い衣を着た人とは、主の十字架によって贖われた人のことで、白い衣は贖いによって与えられる神の前に立つ時のための正義・清めを表しているのです。

私たち人間は横だけを見て、あの人より自分が正しいなどと考えます。しかし上から垂直に見下ろされる神の目からすれば、清く正しい者など何処にもいません。イザヤ６４：５－７に「わたしたちは皆、汚れた者となり　正しい業もすべて汚れた着物のようになった。・・・あなたの御名を呼ぶ者はなくなり　奮い立ってあなたにすがろうとする者もない。あなたはわたしたちから御顔を隠し　わたしたちの悪のゆえに、力を奪われた。」と、私たちの罪深い状況が記されています。

ところが、それと同時にイザヤ６１：１０には、「わたしは主によって喜び楽しみ　わたしの魂はわたしの神にあって喜び躍る。主は救いの衣をわたしに着せ　恵みの晴れ着をまとわせてくださる。花婿のように輝きの冠をかぶらせ　花嫁のように宝石で飾ってくださる。」とあります。つまり恵みの神である聖なる神は、主イエス・キリストによって贖われた者を自分の子どもとして愛し、まさに天の王子、王女のように扱ってくださると言っているのです。そして、その時贖われた者の着るのが＜白い衣＞です。

ここでもう一つ考えなければならないのは、イエス・キリストによる罪の赦し・清めはバプテスマの時一回だけでいいのかということです。日常生活上のことだけでも日毎の赦しと清めが必要だと思わざるを得ない私たちであることを考えると、一回だけのバプテスマは神の子の誕生を表すものであっても、信仰生活のゴールではなく、神の子どもとしての成長を続ける出発点であることに思い至ります。天上で白い衣をいただくまで、私たちも古代の教会の信徒らのように＜白い衣＞を着続ける必要があるのです。

私たち人間は＜Imago Dei＞神の性質を神から分け与えられて造られましたが、創世記３章にあるように、それを自ら失いました。しかし神はイエス・キリストを信ずる者を新しく造り替えて、本来の神を模った者に回復させようとされるのです。エフェソ４：２０－２４に「・・・滅びに向かっている古い人を脱ぎ捨て、・・・神にかたどって造られた新しい人を身に着け、・・・」とあります。古い人を脱ぎ新しい人を着るという歩みはまさに信仰の歩みで、それはバプテスマから始まり、生涯に亘って続けられ深められて行かねばならないのです。この世の力、悪魔の力は絶えず新しい人を脱がせ、再度古い人に着せ替えようと強い力で働きかけます。パウロはロマ１３：１２で「・・・闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身につけましょう。日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、主イエス・キリストを身にまといなさい。・・・」と言っています。つまりキリストを模る者として生きて行きなさいと言っているのです。

神は、その人の罪ではなく、その上に着たキリストの義と正を見て受け入れてくださるのです。バプテスマの時だけでなく、キリストに似た者として白い衣をまとい、神の前に立ちながら、主イエスと共に歩んで行く・・・＜白い衣＞は、まさに私たちの＜救いの衣＞なのです。

（説教要約　羽入田悦子）